

Tradition & Design of the Memories Focusing on Shrines & Temples

1.背景と目的・調査の方法

1.1 背景 しなやかな都市デザインの必要性

3.11被災地の復興において、防潮堤や道路などの都市基盤の整備はもちろんであるが、1000年に一度の大災害に対し巨大なインフラに頼り過ぎないしなやかな都市デザインも同時に必要であることは明らかである。

東北地方は歴史的に、何度も大津波を経験している。地域内のコミュニティの中心-すなわち寺社仏閣-の石碑には追悼碑と共に、津波に対する教訓を記した石碑が存在し以下のように記されている。

- 大地震の後には津浪が来る
- 地震があつたら高いところへ集まれ
- 津浪に追はれたら何処でも此処位高いところへのほれ
- 遠くへ逃げては津浪に追付かる
- 近くの高い所を用意して置け
- 縣指定の住宅適地より低い所へ家を建てるな



1.2 目的 寺社を中心とした復興の可能性

ここから、歴史上長らく存在し続ける寺社仏閣は津波被害有無の境界線になっているということは明らかである。そこで被災地の寺社の被災状況を明らかにすることで、寺社が経験的に持つ津波との関係を確認し、復興計画の1つの観点としての可能性を探ることを目的とする。

更に、技術に依存しない自然との共生が、復興における重要なテーマになる上で、地域の自然との関性を記述し、地域内で共有し、保全していくことが重要であることは明らかである。寺社仏閣にはその自然観の上に、計画的に景観が構成されている。寺社からの景観やその構成、意義を明らかにすることで、地域で共有されるべき自然観を明らかにすることを第二の目的とする。

1.3 調査の方法

岩手県の山田湾を囲む山田町の寺社を対象とする。山田町は古来から漁業が盛んで、漁業と信仰の結びつきが強い地域といえる。また明治三陸津波、昭和三陸津波も経験しており、津波と寺社の関係を把握するのに適していると考えた。前述の目的のために以下3点のテーマを設定した。

①技術だけに頼らないために

→経験的防災に基づいた計画

②経験を伝え忘れないために

→漁業信仰と生活が一体化された空間構成

③自然と共生するために

→環境共生景観の継承と創造

それぞれについて具体的に調査の方法を示す。

1.3.1 経験的防災に基づいた計画

山田町内沿岸部の17の寺社の被害状況を目視によって調査する。寺社の被害状況だけでなく、周辺の住居の被害を空間的に類型化し、復興時の寺社を中心とした配置計画を提案する。

1.3.2 漁業信仰と生活が一体化された空間構成

同調査対象において、社殿および本殿と住民の日常生活がどのように関係しているかを目視によって明らかにする。特に寺社と周辺の使用方法を調査する。

1.3.3 環境共生景観の伝承と創造

同調査対象において計画された景観を明らかにする。特に参道や建物の正面方向への景観構成要因の有無を明らかにし、要因が発見された場合寺社の信仰との関係性を文献や神主、住職ヒアリングによって明らかにする。

2. 調査の結果

2.1 経験的防災に基づいた計画の可能性

全17寺社の被害状況を目視によって確認した.完全に浸



水したものは2件で,そのうち1件は完全に流失していた.
被害を全く受けなかった15件の被害と空間は以下のように
類型できた.

- ・津波遡上方向の正面に位置し直前で止まった



周辺寺社より高い場所に位置する住宅地は完全に被害
を免れた.

- ・津波遡上方向と直角の向きに立地し直前で止まった



周辺の遡上方向と直角に位置し,寺社より高い場所にあ
る住宅地は被害を免れたものの,遡上方向に位置し,寺社
より高い場所に位置する住宅地であっても,被害を受けて
いる場合も存在した.

さらに火災が起こった場合に関して,

- ・津波によって引き起こされた火災が直前で止まった



2.2 漁業信仰と生活が一体化された空間構成の発見

寺社と住民の日常生活の関係性として以下2つの特徴が見られた。

- ・保育園や小学校と一体的に利用されているもの
- ・漁師の作業場として利用されているもの



- ・地域の祭の拠点として利用されているもの



以上から日常的なコミュニティの場として利用されていることが明らかになった。

2.3 環境共生景観の伝承と創造の可能性

寺社からの特徴的な景観と参道,建物との関係を明らかにした.5件で周辺の環境を意識したと思われる環境共生景観が確認できた。



- ・湾の入り口を向いた水天宮神社



- ・湾の入り口脇の祠を向いた魚賀波間神社

御神体が流れ着いたと言われる岬に,向かって計画されたことが神主へのヒアリングで明らかになった。

- ・湾内の大島を向いた善慶寺



- ・地域の山岳信仰の山へ向いた霞露ヶ岳神社

3 まとめと復興計画における展望

寺社は地域内において、長年の津波の経験から、安全な場所へ立地している。その周辺の住宅地は今回の津波被害も免れた。

またそれらの場所の多くは日常の生活の場としてコミュニティの場ととなっていることも明らかにした。

さらにそのような地域内で大切にされる場所から望む景観は、地域の信仰(山田町の場合海への信仰)との関係が見られた。

以上の結果から我々の設定したテーマに対し、復興の考え方を提案し今後の展望とする。

①技術だけに頼らないために

→経験的防災に基づいた計画

寺社のような地域の経験が残る場所を尊敬し、周辺の計画を行うこと。

②経験を伝え忘れないために

→漁業信仰と生活が一体化された空間構成

地域内のコミュニティの中心である寺社を中心に復興する際、その利用を日常的な利用から切り離さず常に住民の意識の中に存在させておくこと。

③自然と共生するために

→環境共生景観の継承と創造

歴史的に信仰されてきた景観を保全することは、その暮らしを持続的にする。環境共生景観を共有化し保全・伝承していくことで地域社会の個性を保ちながら、持続可能な復興行う。

人口減少や過疎化によってまちの存続が危ぶまれたところに3月11日がやってきた。防潮堤や高台移転ありきでまち全体を守るという考え方ではなく、歴史的経験を積み重ねた場所を尊重し、周辺のコミュニティを再建する。それでも安全にならない所に防潮堤建設、高台移転を行うという、記憶の伝承とそのデザインに立脚した、しなやかな復興の方針があるべきではないか、。